

近世名流書画録
義文堂藏
冊





近世名家書畫談下卷目次

○ 諸名家遊歴の事

○ 雪山の軼事

○ 貝原益軒の軼事

○ 柳澤淇園の軼事

○ 趙陶齋の軼事

○ 大雅堂歿後遺墨紙賣る事

○ 曾我蕭白の軼事

○ 謝蕪村の軼事

○ 松林山人の軼事



近世名家書畫談 下卷目次

- 平春海の軼事
- 橘千蔭の軼事
- 應舉の軼事
- 建巢北の軼事
- 華匠篆癖の軼事
- 諸先生真跡落款式附

近世名家書畫談下卷

雲烟子 安西於菟編次

諸名家遊歴の事

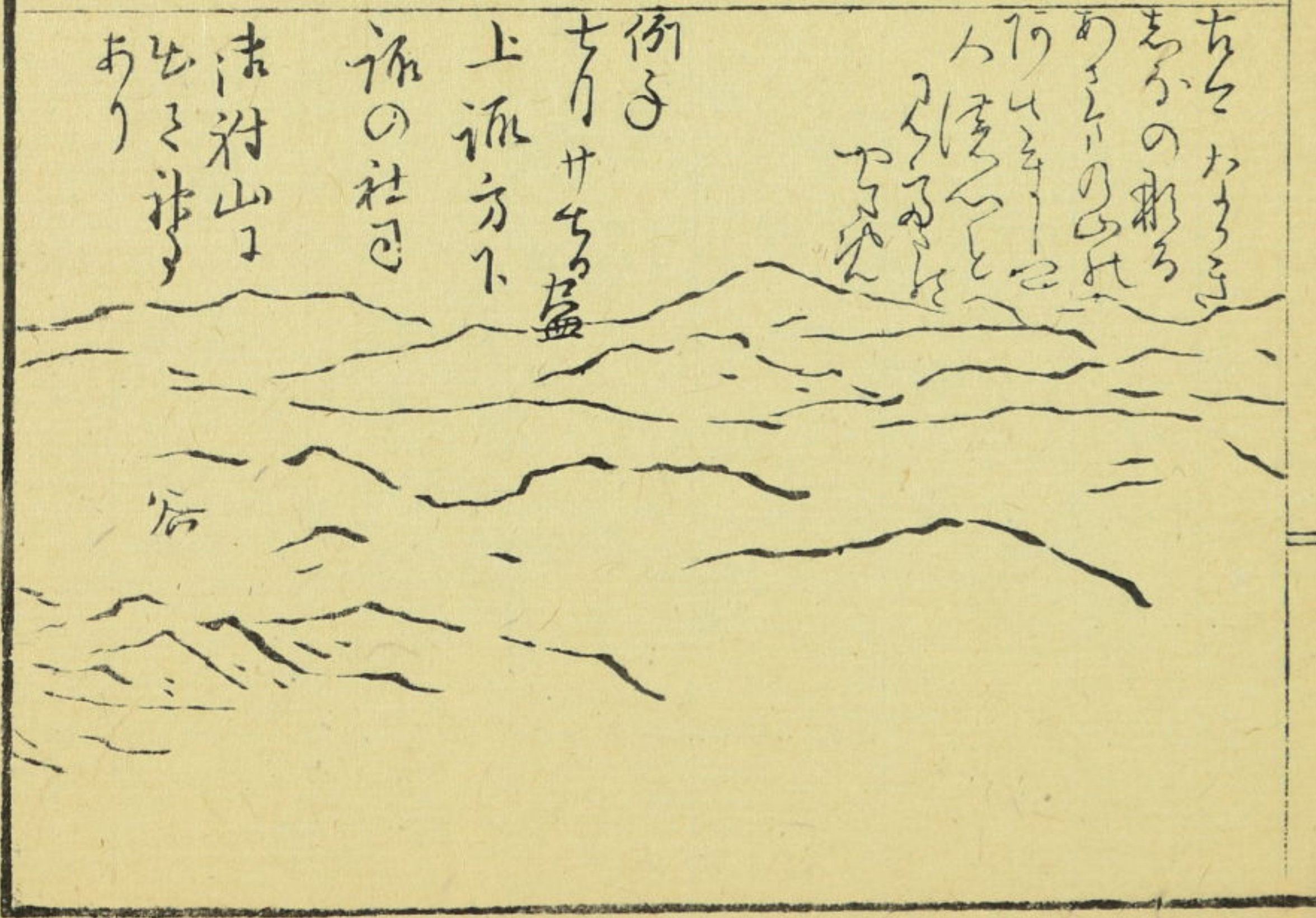
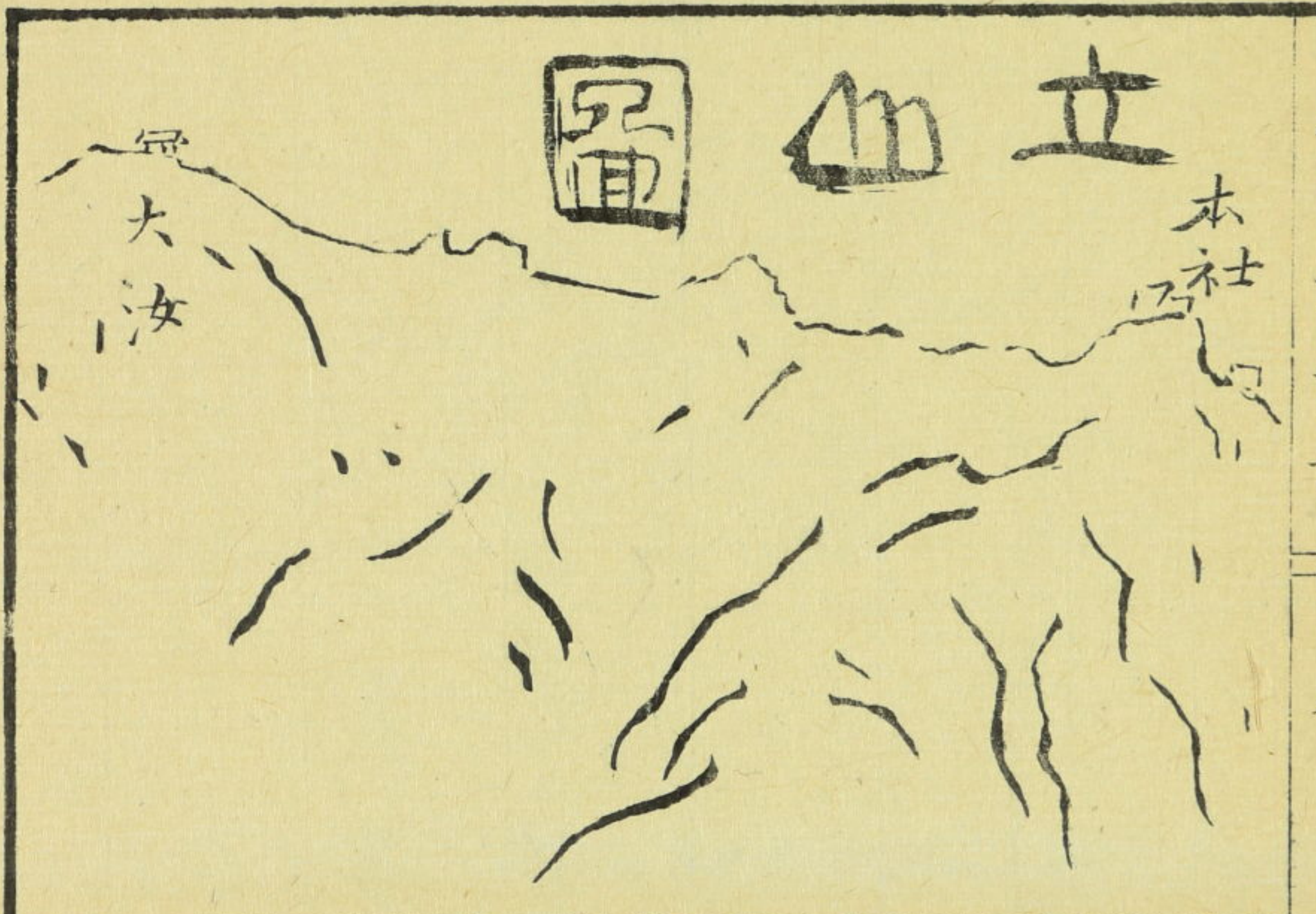
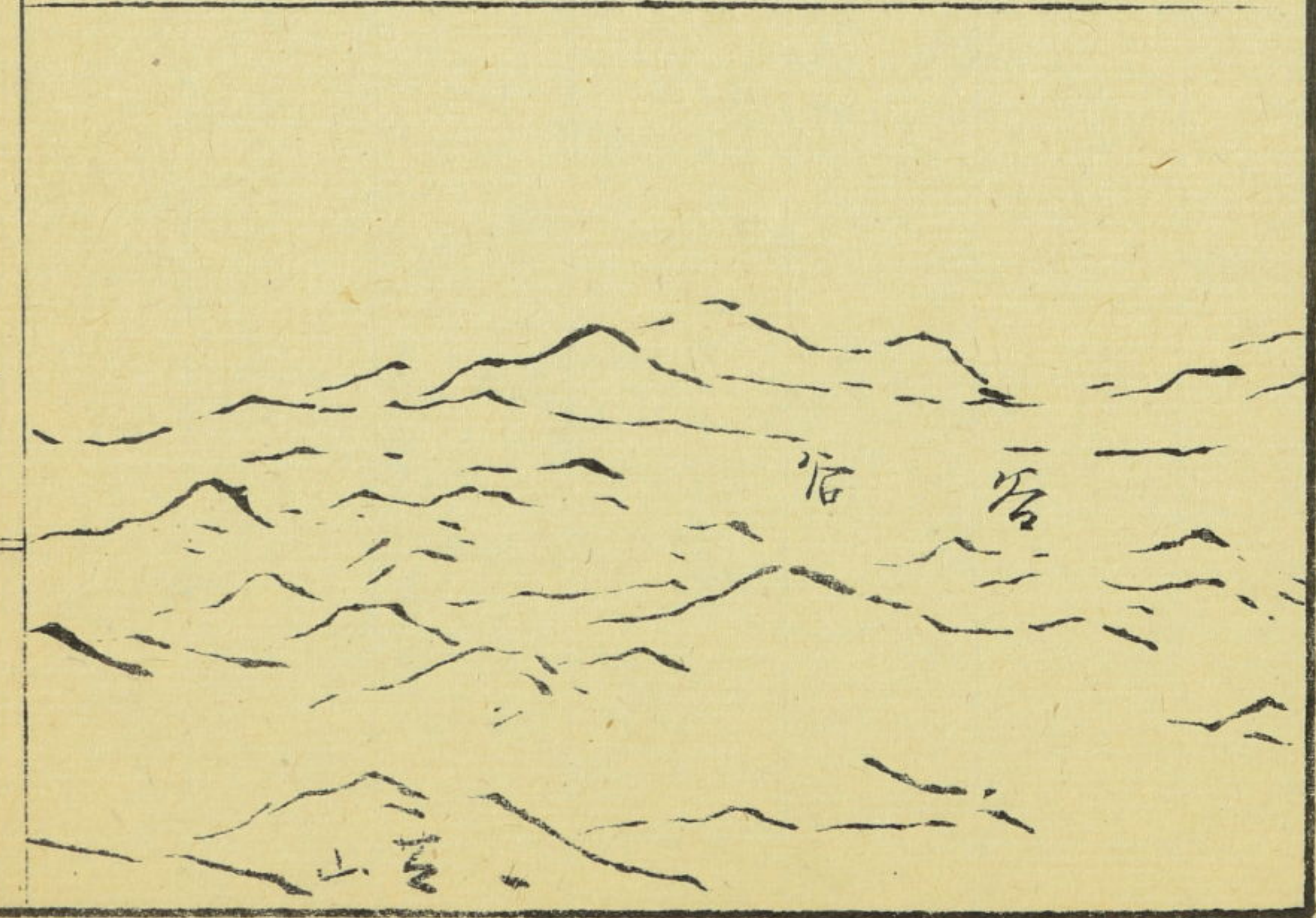
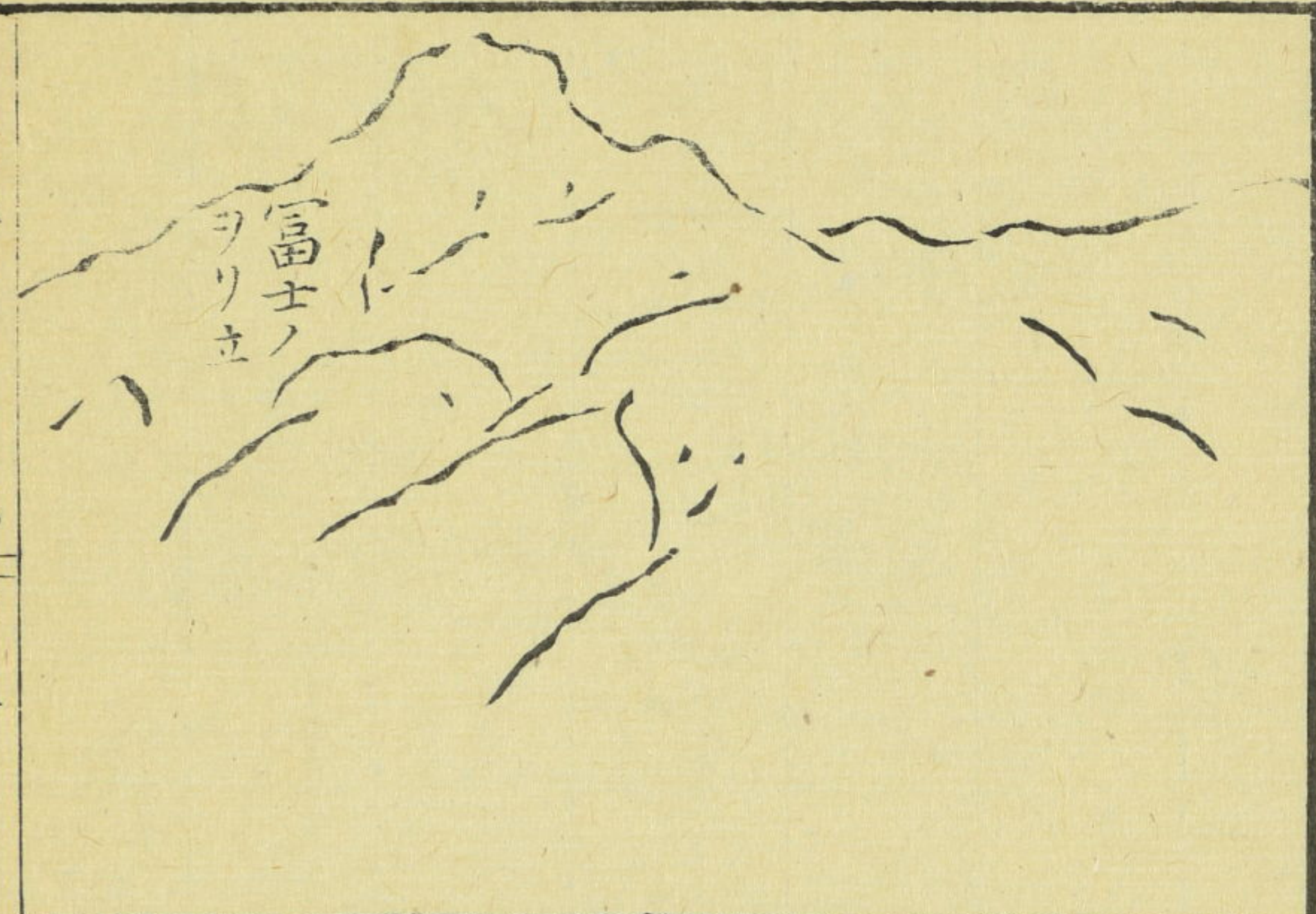
近世遊歴と呼ばび都下の書畫家文會同好やもは於
 筆硯を帯び他郷に遊びて技紙賣ることあり尤も壯
 遊なる者今身一等の望まざる老儒先生信越の行
 里盛なるはありとさき先生學術文章若今の巨擘
 して近くも清の錢牧齋王漢洋の如き鴻儒も先生の
 為るも三舍紙退くべしと承る又吾人となり磊々落落
 生一世を不可と譬ハ貴人權勢も眼中に重ざるをとの

客氣ありて北遊のゆゑ當り其地の諸子弟先生に待
と大早の雲霓を望みぬ一於是先生到家而經を解
けそ古人未發の妙説あり詩文に作れば皆不朽の文
字なり其餘枉草裁墨これを求るもの一紙半箱も
身をも懐素張旭の真筆紙はるごとく一因是潤筆積
て數百金と及ぶと聞及りこれより其地の子弟も先生
の教化よき詩書紙事と居然たる書生と變て其父
兄たるもの愈先生の徳を仰ぐと信聞くごとく先生得
所の潤筆もいふ増え散り去り家へ歸るの日無く其
半文餘ものごとくびをいふ果てて去るやその説の如く

なれば先生の壯遊も唐山の人も及ぶごとく試に擧て或
は問ふ或人答て云康熙年間李笠翁ハ天下紙周流を
と數十年詩を賣り文を鬻り其名當時高くこれを
明の李卓吾陳仲醇の才も不及と云至る笠翁嘗て貧
なること城友告りば其友云子有筆勝鏹基硯同
負郭賣文已足糊口所至輒有逢迎何貧之有と家
言も身一つりされども笠翁も潤筆紙も後て散
去りしとは身へ蓋し笠翁と彼先生とは學問文章
相去ると圓月と團圓ほどのたぐひ有らん其潤筆を
手は増えぬと云ふに至りては先生の高きこと百尺竿頭

又あるべしとて其人等一たび感服の時より其人敗壞せる
 一小時傳紙出づ於菟よ亦して云これハ昔時池大雅高
 芙蓉韓大年の三老人回遊して三岳に登り一時大年腰
 間小帯たる小遣帳なり余亦て身をも表は三岳記行
 と類し背小韓の一字紙類ハ肉ハ起程の日よせしめて日
 雜費並に途中の光景記し又身をもその山川の真景州
 走筆を問ひあり今やせしめてこれを身もれハ一見の間
 三老遊境想像するまたつり因て大畧を左に載は
 七月二日一抄百文六日市藤左衛門於泊尤并當持此方より
 礼紙巻一冊廿六文内の男長九衛門三人荷物案内牛首

迄於て水下の白衣道者なればより同日一百文半首
 七郎左衛門の中食を必せ活料三拾八文米を俵或合代
 一百文韓よりかぶ代一廿四文池おどり身物入用一拾或又高
 あ免代かともするせし類なり或人云この小帳紙又れも生
 往來木ちん泊よりある六部僧の境界より又火食せ
 ざるものめし後の文人墨客生高名紙鳴り口より膏
 梁紙嗜み足紙肩輿に託して生技を賣り遊歴する輩よ
 りこれを身もばいりも殺風景なることあらばせせんも
 うの三老人好む所たぐ千山萬壑烟霞泉石の間はありそ
 空外ハ形ハさるべしと云られたり余この小簿一二頁並に



立山圖

大汝

本社

古々わたり
あふのち
あふのち
あふのち
あふのち
あふのち
あふのち
あふのち

例子
七月廿七の盛

上流方下

流の社也

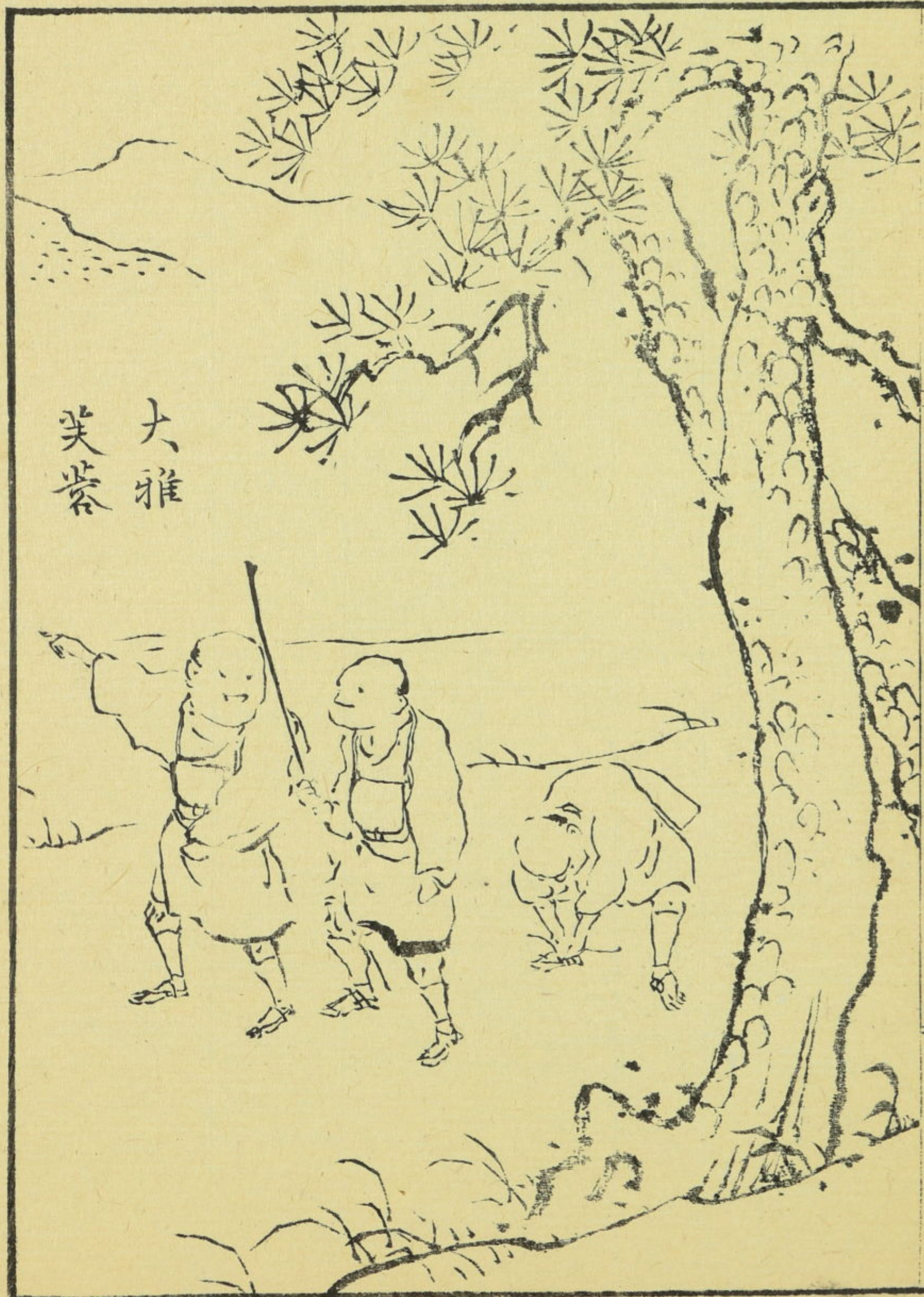
法村山

あり

宿

山

宿



大雅
芙蓉



大年
遊歷
之
處

全法畫
印

あゝなぐも
もよむけ
あゝ

いよそ
いよそ
いよそ



あゝ
あゝ
あゝ

毎法有史稿序

雪山の軼事

雪山先生ハ肥後熊本の人なり代々北島三立をりて稱以元
加藤家の侍醫ありてかゝる家嗣國の後細川侯に仕ひ
食祿五百石次賜家先生の父三立學問欲好く國侯不
彩ひ雪山を具し長崎に遊ぶに比多唐賈の外學才
秀才も長崎不來り好ぶ者多く又居所も縁に隨ひ自
由なりし時あるに三立の僦居に學生の教ハ寄宿せり
三立も資力ある人なればとよ中賃房錢を會らば
却て管待して學問の相手に志する者唐人も名ある人
のとなりたる先生も幼少學問を習ふ直に唐人

後復所謂書字の撥燈法往々紀載は見えぬは文
章の上むのりにては會得し急ぶる紙先生ハ比舶来の
人俞立德の授命してこれ紙受たりこまき又磨澤
先生傳授せしと云

雪山先生書法傳來左に載り

明文衡山先生正傳筆法統脈

衡山先生 名璧字徵仲一 文 彭 字壽承 衡山
文 嘉 衡山水子字休承 文 啟美 嘉之子
全 梁 字棟材 松舍應 任 德元 字吉卿 号花
俞立德 字君成 号南湖 杭州人 傳 德元 字華法 我
寬文初年来長崎客雪山父家凡三年

北島三立 号雪山 初号花隱 又号蘭隱 後号雪
遊長崎父以居傳為業故唐山人每歲來其
家先生穎悟過人故來客皆奇之立德特愛
之授以文衡山嫡相受之筆法立又贈學
君存之圖章立德不來之前從戴曼公學
後得衡山遺法而棄舊學

細井知慎 字公謹 号廣澤 晚年又有玉川奇勝
先生以君子存 先生之圖章贈馬
先生之圖章贈馬

黄蘗隱元 禪師其徒數十人と長崎に至る隱元の弟子即非
ハ尤善書の名あり雪山先生書のこと紙即非も問たると
なり獨立を戴曼 隱元の書記なる元來俗なりは俄に
雜髪して 我邦は事家也(法義の事々跡といへり

名家書畫談 下卷

書も撥籠法紙用ひし雪山先生初め書法を問ひては
 撥籠法紙得て居る只方外の友とて書法は問ひて
 とるんある時獨立云書紙の秘書ても筆力精神雪山
 及ぶば是をいふといふ我も獨立なり雪山も三立なり
 二立是らばと滑稽しとてなり雪山先生江戸に來り
 一は芙蓉の僧は同伴して江戸青山法龍寺に來り道
 來より青山賈人の家より雪山の手より大福帳の上書あり
 一とてなり雪山先生法龍寺紙出て江戸室町浮世草紙
 寓居し時又門人五六輩あり土州藩の都筑道乙小田原
 町有屋某生一人は廣澤先生なり

此時先生号菊巖俗
 稱辻辨菴は母方の姓なり

り醫業紙初む中年よお姓よ
 之細井次郎大夫とてやうい
 或時雪山先生廣澤先生と謂て云
 是下の書、當時未だ五六輩の中にて才一の不器用なり文
 字の形醜くされども久しく字が善書の名をば好ん志す
 ば書名のよ高くあり君子の大業紙失ふべし必以強て
 書紙好むと、あるんといふ事となり實は先生の筆蹟
 い書ふ掩れぬ家とのよほせを心ゆる人もあり雪山先
 生の言果して然り

雪山先生江戸に來る時某閣老或人の流は柳澤侯也非常の人を愛し先
 生又月掬三十口を贈らる又衣服酒食亦紙贈ら家より先
 生潔癖ありて雪衣服を水紙りて洗ひこれを忘る人な

寓居半浴室のごとく板紙りく席紙張る生湯解りくの
ごとき一日先生出てゆれば数日を經て生湯を知らず
閑老きくあひえ東崎人なれば生湯を捨おり先生
家什を奴僕と与へらるる事及先生家へ帰る生湯汚
人のぬく身は破薦紙まとい竹杖紙つきかけ椀を拵浮世
小詠に至り曰我居の事なりや家主曰先生は湯を志ら
ば止と紙は君上の有司お告げ斯ハなせりと云先生曰
我より劣る人を羨しく思ひたるゆへ家紙出く巧人となり
橋の下はゆくと数日空飢寒をたぐひ故郷へ帰るより
ぞとて飄然として去るそれより青山油籠寺に至り沐浴

一服紙改め半年程止宿して西へゆき此時書紙亦むる若
多し青山久保町より大福帳の三字を書きし此時なり
先生元権勢富貴の人紙嫌ひ性酒紙嗜しみ賤者といふも
酒紙をぬめ字を求むる揮毫し与ふ故に賤者多く先生
の書紙傳へしより三井孫兵衛親和賤者の傳へたる三體詩
絶句全く書く家真跡を得たり
雪山先生東叡山櫻盛に閑くと閑記廣澤先生を謂く
曰晴日より人多くして喧し雨中の花紙はなれと物
節雨降りければ雪山廣澤両先生門人五六人を同伴し
酒肴紙携り東山に至りし雨のよく降る時より雪山

先生ぬれぬのう大杯を傾け榎樹より志を語り落家
雨の清りぬをこねる浴せざんばあるべしとて頻て頭紙
さへ全身を水におせまはしく大碑して泥土を轉ひ
て物られりと廣澤先生の話ありとぬん雪山先生は戸
よりあり一時を際病甚しくして長崎に帰りて浮十六
年もある世へつめとらひ赤貧うとて倍石の儲けなまき
とも崎人尊敬して名紙めて呼のなく先生とのえ
云うりとぬん酒あき時の字紙字一酒石と与一文字
の數よりて酒肴紙送り平生碌紙おせりとあり
雪山先生の書は舶來の人殊ふ賞とて在り價貴くお

物りしてはつり又先生の書紙おんとて黠る者も先生
の他適紙窺ひて先き路傍の家は筆硯紙儲け教人集
りて各字を言ひ先生これ紙見て云書はかふと我書く
りぬとて筆とり數幅を作るは海肴をすぬ次才は
紙を出ひ先生與る系一帰ると紙忘れた夥しく揮
毫せしとぬん
長崎より富貴あるりの多し常ふ奢侈を極む或時一
人の富家筵紙開き同僚紙招ともありは時家方より謂
て曰若雪山先生紙迎ひ席上にて字を作らぬはこれ
外の馳走なりと云是ハ先生元來驕奢の家に至らざる

紙知りたるの難題なり時は亭主輕智を由り兼て先生
 常の愛する所の賤者謀りていせざるハ今日ある所は
 美酒佳肴ありて終日の興談催ひ先生も人もいかに
 先生これに涎を流し急なほびりくるれがいのゆるるる
 きの家うして席上豪具をかぎり水陸并至る先生一見し
 て忽ち奢靡を惡む杯をとり東飲傍若無人あり時
 主人云先生の揮毫を煩はと娼婦お伴して俱にこれを
 乞ふ先生云まゝ兩名汝紙并て三名なり三紙紙は二
 展よとて大筆を揮き一紙とふ陰器一莖を言出
 し三名も三紙を授与へ手紙揮て歸るは及途申す

天濤先生と逢ひられ先生云此程を語連のころ形
 と云られ雪山先生云馬兼ども一莖づかつげたりと云
 りれしころ天濤先生はほろ度解先生と語り連し
 としん

右雪山先生の数条を雪山度解兩先生合傳といふ
 書ありて其まゝの抄出せり

貝原益軒の軼事

貝原先生篤學徳行の君子儒なること誰か知らざるもの
 あらん又筆札をも好まれしと世に傳ると稀ある故に
 賞せざる少なき紙見ると星鳳の如し先生の字帖も東崖

先生の歎しめひて云益軒子之書端好有度老而不
 衰云云これら尤高年の作なるべし於菟向は行書七律一首
 小幅紙身一とあり字様を古法帖紙修熟せしめのと見え
 たり行筆尤美事又之因は福岡藩邸山退齋先生乃
 話なりと云或人の語られ貝系先生道事あり聞まふと左
 小録は先生京師へより時道中湊川をるぎ楠公の昔紙道
 想し折しも田間は一孫丸のぬきふ高き所ある紙惟身て傍
 りふふ老農はこれ紙問れは答て云こそは往古より口碑は位
 楠公討死しぬひし時遺骸をこつては塵しふなりとて今
 日刻りし此紙のぬきむ畦畝の間この所は除き耕しあふふ人

語る先生この言紙きく不覺涙下り慨然とておのひらく公
 の忠臣あること古今は比なく芳名青史は垂れ千歳不朽な
 りとつとも其寔空の石今かく荆棘は没し片石の表すも是
 といふ人をかくてる故来りの知ぬ牧豎田夫の為は此所
 いくばくもなきや吾輩讀書の者聊義理をも辨へ此事を問
 くまふといふてさべき責て公の梗槩紙片石は記し是を表
 してあはば往来の人も自然と遺跡の存するをも知り又牧豎
 田夫の唐突をも免れんと思ひ生白は先生兵庫の高賈某
 の家は宿紙拾ひ某は兵庫の富者者も福岡族此夜先生宿主人小
 旅中の事ども物語り湊川より所見所聞並は自らの趣を

月も及れば主人欣然と云ぬも難有思召紙まの哉
 鄙人数代此所は住居一畢^{ひん}素^そ生^{せい}古^こあ^あば鄙人おも楠公の
 民あり物換り星移り公の瘞^{かま}り一^い所^{しよ}さ^さかくなり也
 嗚^なづ^づきことどもなり鄙人数代此所を先生沛國の所
 用をも蒙^{まう}り右をりて多口の家眷^{けん}紙安穩^{あんゑん}といつ居^いん^んを
 先生此夜の紙趣^{しゆ}さ^さは付力^{ちりき}紙出^{しで}ま^まつ^つひ^ひ一^い況^{いん}也公の登^あ
 域^い先生は筆^{ふで}をて顯^あり^りと鄙人も又望^ぞ所^{しよ}なり先生系^{けい}師^しは
 おい^いさ^さる^るち碑文を作りぬし^い福^{ふく}速^{すく}ま^ま必^{かな}以^も賜^{たま}り^り碑式ハ
 其上^{かみ}指^{さし}圖^ず紙^しは^は立^た石^{いし}の^の速^{すみ}成^{せい}就^{じゆ}中^{ちゆう}さ^さん^んと^と殊^{こと}は
 喜^{よろこ}び^びり^り無^な程^{りやう}先生系^{けい}師^しを^を碑^い文^{ぶん}紙^し作^さり^り約^{やく}の^のぬ^ぬく^く

途^{みち}も^も人^{ひと}へ^へ賜^{たま}り^り紙^しが^が押^おし^しい^いて^て猶^{なほ}は^は帰^{かへ}國^{くに}の^の碑^い式^{しき}委^あ
 く^く也^や認^{しん}賜^{たま}れ^れり^りと^とて^と勿^なく^くは^は別^{わか}れ^れり^り其^{その}後^{のち}先生^{せんせい}の^の書^{かき}あり
 り^りハ^ハ人^{ひと}に^にあ^あつ^つて^て碑^い式^{しき}中^{ちゆう}に^にあ^ある^るべ^べと^とて^と開^{ひら}き^き見^みる^る左
 手^{ひだり}あ^あつ^つて^て先生^{せんせい}の^の言^{こと}お^おせ^せし^しの^の碑^い文^{ぶん}を^を返^{かへ}さ^さる^るべ^べと^とて^とり^り
 一^いつ^つり^り宿^{しゆく}主人^{しゆじん}不^ふ審^{しん}な^なが^がり^り或^{ある}ハ^ハ改^{かへ}竄^{そん}一^いふ^ふこと^とり^り也^やあ^あんと
 紙^{かみ}を^を返^{かへ}し^しや^やり^り再^{また}び^び紙^しを^を待^{まち}つ^つる^る又^{また}程^{りやう}も^もなく^く書^{かき}来^きり^りて^て云^い我
 等^{われら}先^{まづ}は^は湊^{みなと}川^{がは}の^の身^み同^{どう}と^とる^るを^をり^りて^て一旦^{いつたん}さ^さ思^{おも}ひ^ひし^しま^まふ
 勿^な卒^{そつ}も^もも^も教^{しゆ}へ^へは^は其^{その}言^{こと}漏^{もら}は^はべ^べり^りぬ^ぬ退^ひて^て考^{かん}ふ^ふる^る楠^な公^{こう}の^の精^{せい}忠^{ちゆう}
 千^ち古^こも^も互^{たがひ}り^り日^ひ月^{げつ}と^と光^{あかり}を^を争^{あそ}ぶ^ぶか^かる^る希^{まれ}代^よの^の忠^{ちゆう}臣^{しん}を^を礪^{たが}
 書^{かき}生^{せい}の^の拙^{せつ}文^{ぶん}を^をこ^これ^れに^に表^{あらわ}せん^んと^と誠^{まこと}に^に己^{おのれ}の^の分^{ぶん}紙^し知^しら^らせ^せる^る

ことになり今是非心も恥ぢ不覚熱身汗を流さうかれば
 此事思ひ止め返くも是れ一藩忽の言を中たりと言おこせ
 りとなん實は先生の徳行此一よりてもあるべし此後
 義公立碑の成りありて碑面は嗚呼忠臣楠子之墓と云ハ
 字を隸書して伊予づく遊ばし背は舜水先生の文を彫
 りぬひ跌宕は楠河泉三國の石材派は用ひありしとなり
 昔時楠公ハ三國の太守なんかく法心を以用ひありしと笑へ
 うり曾て又墓田をも以附しありしと承る實は希代乃
 美事と云べしこれをりて見れば貝原先生暗は待處あるは
 似たりともしいりん或人又云舜水先生碑文派動もそれ其體

を失へりと云者ありふ文ハ舜水文集とありて楠公父子乃
 贊辭二篇あり是ハ其一なり義公は立石の以ハ舜水先生の
 既又致はのふと見たり其體派失へりといふハ管見と云

柳澤淇園の軼事

柳里恭ハ世は知られ人なり其身ハ大夫として能く職
 たる名家なり隨筆心より稱と云りのあり其中心又画法を
 論せらるる辨は人意の表と出で神も通べしと云へば
 心より稱と云隨筆甚まなり勢州四日市の驛は西村

氏とつるは秘藏せり文の發端ハあらぬ系表日の里より
 料と云女郎ありと書出終る生涯の字文を妓婦乃
 帶一筋又代んと分て洒落なる文法あがう一部の文カ格
 別乃論して拔羣の隨筆ありと近きこそ愚雜俎と云書
 又見たり又郡山某の話を左記以淇園先生一日書齋
 て山水を作られしつら窓下又乞人あり手紙つき伏して
 是汝何ひ見る其容蓬頭跣足敝衣縷々として未だ昔
 日一飯を乞はざるありと乞ふも衰顔不允雙眸炯々
 先生画局終り始て頭を擧げ乞人牕下画を見ても辭
 せざる體汝見謂て云汝ハ我画を見て樂みさや乞人答云

先程より此草紙見たり身ハ青松白石の間はありて烟
 霧紙弄るる如き心地のしほ懐のいども君の曾懐ハな
 て扱はるれ侍るなりとそ程箕踞してたゞ此時先生
 様手をお扱もく汝いりなる人な我も又汝ハ曾懐を
 おしるりては風流ハ吾輩ハ一籌もゆつらざるものと云
 へり我画汝ハ賞玩の預りといふ事盡べりては汝と云
 べりて手づつ画紙巻て与へんが乞人欣然とて云賤
 人これ名山の間を展覧し程邱壑とこの奇を聞て
 へりて画を抱き手紙揮りてさる日あらば乞人又
 来りて詞を讀み先生固よりゆき思ひはれが急速り



逢ひて仔細をも向りんと志るると人云此後を貴筆紙
賜り展観とるごとく是れ画中の松の仙風の響をひく
がごとく清涼い掬く飲んと思ひ煮て一邱一聲乞人持て
なほさるるのちこれ謝し奉るべきは辞なり乞人近以某
山某處に暫時居紙ト一ひの松乞人の賤しき紙忘れぬ
明日午後住家紙尋ありて聊寸志の謝をも報し奉りま
ふんとて又飄然とて去る先生のいふは怪しむ又其趣の
凡なるとるをも思ひて生翌生處に到り身するは山紙登ること
十五六町より山上古松数百株の間小徑あり生徑三處の行
れもなく又往て半町をりりて少くお開けたる處あり

て峭壁に垂枝の松あり此枝は一條の繩紙下げ新しき土瓶
の中は炭をいけ湯も能くたち又新しき手桶に清水を貯
へて酌を添へ傍に新しき薦を席をりあげて上は皆
茶具紙ならぬのづれも鹿物なれど清浄の品なり先生思ふ
はこれ乞人我為に設けんとて生席を望し今乞人合
つるべりと待と多時されども終ふ来らびにさるるおるて先
生手つら茶紙立て教盃を傾けらるる席上便面ある紙見
く手ふらけり開き見ると一首の絶句ありて云這廻空過二
十年肉重不能飛上天抖擻衲頭還自笑囊中也沒
一文錢と狂草の字一筆勢飛動せり於是先生不覺

驚嘆再三して自ら失わがめく程乞人を待てども来らば
遂に家より歸りしとせんされどあ乞人のいふる隠君子
も或る仙孤学ぶ者もやとて先生時々々々
いなり

趙陶齋の軼事

或人云昔時一士人其君の爲に謀るとりて大璫の門より
樞要の吏に邂逅はれども吏ハのと養食の程を以て
只多き紙負り飽と紙知るは於是士人これに餌を以て四時
の珍味を贈りこれをつらむ白錐紅緞茶器古董の孰陸續
贈るこれよを志すも日厚く兄と呼び弟と呼び或る

相俱に酒樓伎館に同遊流連して士人も又これを爲す歎樂
を奏せりかの吏百士人に云せよ趙陶齋と呼ぶ所の善書
ありと聞く君かれを拉来る小酌を催して揮毫紙
見て興紙助け且又佐觴せんといふん士幸に陶齋紙知
る紙り急ぐ是紙諾し即日陶齋を訪ひて云僕恩人
あり久々先生の墨妙を賞し目前に揮毫紙紙
畫縁なく今僕を介して請ひ来り僕が爲すかれが宅に
至趾紙回さばかれが喜ぶ僕が幸なり陶齋これを許諾
して一夕士人と俱に往く刻を以て衣履畢りて直に後廳
に引く是夕主人廳心に紅毯を布き筆硯を設け物々

文具排列八窩壁の壽星龜鶴の三幅對をうけ前は巨大の銀瓶を数朶の牡丹を挿し庭際を一区の茶室あり一樹一石も奇あり其女富問ひて知るべし既に耳房より西三の嬌婢一樣の艶粧を茶を捧げ出づ尋て名佳肴次第に至るは淫奢又問ひて知るべし時主人先づ太白を浮め稍威福をちし士人の漏れ士人再三杯を領し一飲して覆ひて杯を復し士人復し語頗る不遜をゆる陶高忽ち箕踞盤礴一鯨飲数杯を罵て云吾ハ知名の趙陶高なり今夕は来るは獨窮理て脚を鵝群に失り故輩俗士といふんぞ

書奴となりんや且壁上の幅俗悪いとおべしと云此話何人やらんより画中を縦横に抹し飄然として去ると云此話何人やらん哉漢文りて記し瓜今拙譯してて載せ或人云唐山のて此話の類と堅瓠集ありと一則を贈らる目て左に附て工部主事某奉差來蘇燒磚其内閣属求沈石田畫主事到蘇即出票拘之石田到署主事出紅紙一張索画石田盤膝坐地磨濃墨扯紙下半團作一毬於硯上蘸墨印下墨團三四用筆勾作黑鷺鷥題云青天一箇木霹靂千山萬山無鳥跡鷺鷥飛入破窓中一身毛羽變成墨寫畢遂拂袖而去

大雅歿後遺墨以賣事

大雅灑法の山水を画すにめたる扇面を圍りて自ら携る
 近江美濃尾張へ集んと人多く恠て買者なり於是空く京
 帰らんを濃田の橋を過る時其扇を出しとく湖邊に
 投じて曰是をめて龍王を祭るといひ其画の妙なる人あて
 知らざるに至りて其和壁も燕石にひとよむん栗山先生の
 話ありとて或人の云大雅死後門人亦老師の麓中より多くの
 遺墨を搜り出せり京攝或ハ隣國の人これを傳へて遠く
 乞求るりの各報る多金以て其金集りて七百兩にまで
 り時門人相謂て云此金以て老師の不朽を謀るべしとて

栗山先生へ其多金以て碑文以て先生云ふ先生云ふいと安き事
 あり老畫師を一大不朽にまでし我ニ策ありこれを後人
 といふさうばいらくと向へは先生云老畫師の生涯を吾筆にて
 残さんとは望とるなりされども吾筆の老畫師を汗さん
 あり其七百金を以て一産の大石を求め佛像をもあし如
 人の様なるもの割第一其骨間をたいがごとく深く刻り
 この外ハ行状生卒をもさるさびこれを大津栗田の道より
 望む山のまゝ安置ば往來の旅人此處に到りてや大雅堂佛
 ありあるそやあどいん又後世に至りては益大雅堂佛の稱呼
 傳るべしこれ老畫師も無何有の郷に於て一穴して此舉を

領い盡しつゝ時又門人おのふ不^ふ凡^凡の盛事を解^とせむせちよ
碑文を乞ふ先生云瑣^たたる文字又て一片石^い識^しを^とそ^も費^を
を數十金^をとびひさば^はそ^の殘^を金を京師貧民^に分ち賜^ふ
これ又老画師の喜^もあも^も慙^ひ碑文^に載^て美事^{なる}よ^うと
いれしよこれ又門人^に不肯^して遂^に先生^を奪^つて^しれ^ば門
人等蕉中^の禅師^を乞^ひ碑文^に成^しと云固^く懐^かあ^ら伊勢^守
照寺^の月仙^{和尚}も一時^に畫名^{高く}年^とと^ら千金^の潤筆^紙
好^むと云傳^ふさん^{ども}遷化^の後^は画價^もなく名^も又^從
衰^へり^しを譬^{ゆる}よ^う一時^に權勢^を得^て氣^の盛^んな^る
も一旦^に衰^{ふる}よ^う至^りては門^に雀羅^を設^ける^がめ^し實^に

ハ蓋棺の後して定るとやん宜哉

於菟^按は思孝云長嘯子の吳山の歌仙堂を双林寺門
前^に移^{して}大雅堂^を建^て六池^に大雅^が致^及生^門人^おら
ぬ^り惜^むべき^の事^もき^こ翁^彼哥^仙と彫^刻何^れや^まの^世
に傳^へま^らし^てある^は其^志空^きの^こう^大雅^し又^生
前^に謙^遜篤^實の^人あり^しや^うく^已か^ため^よ二^が舊^跡は^く
あ^らひ^移改^むる^をこ^らあ^らし^とせん^や門^人の^私心^もむ^べ
と云^ふ宜^哉

曾我蕭白の軼事

蕭白の京師の人画紙^紙性^又剛直^すて屈^せむ^一日本^願

寺主使僧りて画紙乞ひれしとありかの使僧ハ大教主の命
 ありと自らまゝんと蕭白の戸紙叩き吾ハ門主の使僧之
 蕭白ありやと云蕭白これ聞き内より大教主にあげ罵
 りて云汝何物の袖子ぞ猥不遜なるぞと蕭白とがり
 呼ばる蕭白はこゝを押ぬとて使僧をせしとありん
 又九州に遊し備前侯蕭白の能画あると訊き其の金地
 の屏風画を乞はる蕭白命に應じ濃墨淋漓一氣に
 画りて侯特にめでありの潤筆銀子七枚を賜り其時蕭白
 云数枚の銀子吾大教主にありと云ふ侯はこれ
 聞ひいんが彼は為儀りて報ひしとて更銀五十

枚を賜ふと云又常大雅堂と交り厚くある時大雅蕭白
 粉を得蕭白は約して云近きふ来らば製し奉らんと蕭白
 りこれ紙好む日ならむとて東山を訪ひ相對して雅談時
 紙移はるるは蕭白の事と互に口を争はるるごとく日既
 晡なる時至りけり大雅云吾腹枵然し君もささるらん
 とて妻王瀾に命じて茗粥を出し相與にこれを喫し又の
 めく風月を誇り夜もゆくわけぬが大雅云君の陶器の
 闇夜に挑灯なるはかのおまじとされと吾家は其具なりと
 園燒の蠟燭紙点して送る蕭白直に是を掲げ蹠蹴とて
 評り又或時蕭白我に對し画を望み我は之を乞ふ

繪圖狀亦人とあるが園山ま水よるべりと語りしとこれ
或人の話なり

謝蕪村の軼事

蕪村は丹後與謝の人なり謝を氏と名は長康と云ふ所
住を俳諧紙巻一名一時は高し又画紙巻一法を元明諸
大家より尤山水は長ト又狂画多し於免按せし傳
りの十は八九は賣作多し曾てきく日光鉢石齋藤氏の家
蕪村の狂画を源平盛衰記巻軸あり是は天明年中行脚
の頃此家より暫く逗留せしと此傳居主人盛衰記を讀其旁
は横脚しき其後妻をきき筆は信て寫し終は數十紙

と及び蕪村歿後其妻黠婦ありのりて此事を語り遠く
日光より高取氏に就てその巻軸を贈し得て京師に
ゆり多金紙巻たりときく故は巻軸今ハ其家より傳り
びとあり惜むべき事ありけり也

松林山人の軼事

松林山人名徹俗稱松林羽矢二松林を修して林氏とせり淺州
傳法院門前を僦居して薜蘿簷を垂れ疎竹窓を常
多く人と交らば閑適自ら甘し画名一時は高し志は
猥に作らば是時高士と稱し自は高ぶるは賤しき故
或ハ排優を弟子となしこれに己が名を嫁し一時拙技紙

賣るりのあり山人の志うび嘗て酒を嗜む時吉原町に遊び酒の為ニ数日かここあり娼妓を酔をくらふひ画を乞ふ一紙半指も作らざり常ニ世話となり茶屋某ニ墨梅幅を作らざるを乞ふ是ハ平生ニ報ゆと云々山人真の画史と云べし嘗て病ニ卧し自ら起ざる紙知り其友ニ托して云我死ハ墳上より一片石ニ南無の六字号紙表して是れ凡人の末景こころ至りあなむあなむありと一笑してこれとなん山人歿し近江の彩瀾源先生の撰文より墓碣記あり山人ハ常ニ先生と厚く交り故此文能く山人紙表せり故ニ全文紙左ニ載し因ニ云彩瀾先生ハ俗称佐々木源三郎と云云前ハ

帶刀ともいふとあり隠操ある人ニ晩年東叡山の北芋坂と云所ニ幽居し再び市中ニ出ば著述ハ詩経書経の自註もあり又詩文遺稿もありと承る

松林山人墓碣記

源世元 号 彩瀾

山人姓林名儼字稚瞻松林其号肥前長崎人以善画稱尤巧著色花卉翎毛冠于一時山人為人風神俊逸嗜酒不拘曠達之士也七歲時熊斐見其画奇之曰此兒當不減沈衡齋始遊京攝間未
有知者安永末來東都時獻王盛延文學書画之士乃召見便殿大稱旨因与諸賓客交文酒

之會恒必與焉於其是其名靄然而興諸公卿貴人
競求筆跡使者踵門綃素充室然當其有錢則雖
權勢之需不肯執筆率在妓館酒樓間轉飲流
連動輒經旬不知在處至門人倩人物色搜求若
或囊中索然則杜門謝客攷揮寫雖屏障大幅
不日告成以故請畫者或謀門人時之云既得濡
潤乃復如初其曠達不拘大抵如此矣山人又終
身未嘗為娼妓掃片楮有敢請者則曰林山人不
能為汝輩畫博士是時風俗頹壞士人無恥輕俊
之徒或有囑娼妓唱名者山人蓋激此也寬政初

罹病殆死自茲遂不復飲酒日默坐一室焚香念
佛非後曩時山人也知友皆憂之居三年賣廬治
裝將西往洛陽采隱而未果舊病再發遂歿于故
人之家山人不娶亦無兄弟或曰山人唐山賈人
之子也

平春海の軼事

平春海大人ハ和漢の學に通じ靈懐より邊幅なく向
國學者派ありといふやまと魂といふこと張る大人
のくまらるるは答云これハ古言と歌よむは真淵
の道と云ふところは孔子の道を道といふは

あり和字ハ國史律令の類尤精覈し著述數種ありて其
家ニ存まるといへり又書を能く仮名書ニ上代様を好む佐
理卿貫之ホの體ニ倣ひ殊ニ賞以盡し大人の心友令ニ存
まると人ありこれホ聖大人の國讀ニ通をほりり人時ニ大
人自筆裁作の詩教首を示さる是紙身ハ字體未法ニ
類一行筆俊腴品格尤高し世人多くハ大人和歌の作者ニ
る紙ありて書法の賞以べし紙志も亦況や詩も又工なる紙
志らんやされども詩ハ大人心紙志にせざるおなりと云今
其資料を左ニ附載し以らる吉光片羽と云べし

偶成

平春海 字士觀号
織錦翁

陵遲習俗日浮虛辨博驚久學却踈聖經賢傳束
高閣爭求新種舶來書
文苑家々抱大志萬言下筆亦容易提韓挈歐辨
論雄時失焉哉乎也字
坡老篇章元博大放翁詞氣自豪雄迫人學宋為
何語纖弱輕浮比之同
紛偽學幾支流各自張門互效尤禮讓恭謙此
何物狂言罵詈蔑先脩
儒雅原謹慎作本風流豈曠達為先看他世上青
衿士多是狹斜惡少年

寄題某樓

同前 此作原以無名氏傳

幾歲無惟稱太師著書不厭災棗梨究經未試編
蒲苦摘藻寧知織錦遲偽說生前斲可駭盛名身
後恐難期寄言臆慕諸兒輩謾喜新奇莫曠時

橘千蔭の軼事

橘千蔭大人八年十二三の頃よ歌よむと汲父の枝直に授
りそれより一日も怠りまざるごとく長じて古学を好み真
淵に後ひ深くこの道に至り萬葉集略解三十卷を著し
又書法ハ松花堂を慕ひ其妙を伝へり又入木堂額傳授
の諸法をも学び又画ハ建部綾足に学びて其裁量も

傳りたり岡野守黒と云ふ大人の尊りて小倉の百人一首を捧
又上せせし傳へんと大人の親友に便りて乞ひられいとやま
となり小倉の百首よ新百人一首よるべしとて日あふま
ハ木堂傳授の書法り揮寫し贈らる時よ其秘傳を授り
ふはや人の難しんが大人云ん秘するとはきこひたりと
いはれし其人となり推しよる守黒翁ハ都下の富商に
てあせせし鷹皮紙の行れざり紙豆州熱海の今井半左と
りるものと謀り良紙を抄出に栗山先生踏めめひこの
紙を金花箋と名づけりこれより栗山先生踏めめひこの
扁額も栗山先生の書なり守黒翁ハ篤実の人なり又俳諧を

も能く書は松花堂を好みお人の書を書きしむ故に如
 してお人の七十餘うて世に語りありその正月元日は菩提
 所兩國の田向院に佛齋して和尚と逢ひ懐中より片紙に自
 筆のて橘千陰之墓と題せし紙より云はれし歿後には
 墳上はこれをして表し給れし死後にはさざりし子孫を重
 戒名とやん福をうけし人無何有の郷に去りては鬼をれ
 角まれあらんやれや呼吸の通ふちなきひなるとはさ
 ひふれはさい云ありとて一筆して帰りしは幾程なく家
 よりお人の訃音和尚へ告あつたればお驚きて死あはれ自
 筆の墓表を和尚懐しうては家より志すべしのことごと

かたりしとちん実にお人の和歌の感徳のこたはるは此一事真に
 達者とも云べきやお人の友今も存する人なきとてしるくお
 うとる人其後林祭酒公の法撰文より豊碑建立せんとし
 きこへし

應舉の軼事

或時應舉は此猪の園を乞ふ者あり鹿澤まが目のあつり
 野狹の師より孤身なるは幸ひ矢背より老婦を新紙負ひ
 我々家に来る此事訊問する山中よりいたす見るとありと
 答ふ因に托して云汝うさねこれを見れば早く来りてこれ
 告より厚く賞せしむと云やうなるは月飯ありて老婦が

家のくさるる竹林中の野猪来り臥し老婆是狐身を
 よう遠く京へ来りかくと告りて挙ぐ云ぬまづ降りて必
 驚くづらひとて還り門人西三輩以て後ひ矢背に到りて野猪は
 狐竹中の所居より挙直に筆をとりてこれ狐なりと老婆
 は厚く物なごともせし夜吾家と論るに後これを寫真
 てほみ鞍馬より来り老翁は野猪の狐問ふ山中常は是
 を見ると云回て画く所の狐狐も示しりこれ老翁之を見
 て画はよとつども野猪はあはれ必病猪ありと云挙か
 とらきて生放を問はば臥猪は安睡の中といつども生放夜お
 のつらひきほひあり僕山中より病猪を身するは実この

画のごとくといつけれが挙まめて曉りて老翁は野猪の形容狐
 具は問ふ翁これを説くと甚詳なりこれ固て挙ささの
 画而をよとて翁の口傳よりて改め寫は後又矢背の老婆は
 ささふ見る所の野猪狐問はば老婆云惟む下彼野猪翌朝
 竹中の死ありと告く舉是狐聞きつよく老翁が云を感
 めるひ老翁の来る時後圓なる所の幅を市りれば是
 真の野猪なりとて驚嘆せしなり

於菟按は近世京師の画家多くは應舉の風を出でるは
 なる一実は應舉の近世の名多かり長澤芦雪も此門より
 出で尤名紙はより吳月溪は始め蕪村翁は學びて其風

孤也又應舉をも受まじ各々傳派得て後又自己の工夫
を以て画く豊彦景文南岳の諸家ハ皆吳家の法より
出たり

建巢兆の軼事

巢兆ハ建部氏名共親号秋香菴又号菜翁荏戸の人
父ハ山本龍齋と云書家なり故有て千任の藤澤氏又寓
居し後閑屋又遷居し俳諧を以て家派なせり又画を好
し自ら作る人物花卉翎毛山水とも又画家者流といへども
皆驚異ハ又俳諧自画賛ハ紙上ハ溢る其細密なる
りハいまだあり又好て舞樂の圖を作る其宗と云ふ

ハ土佐より出て洒落ある者ハ鬼念佛の圖あり嘗て市谷栞
香屋某ある者結構ハ屏風紙仕立巢兆又画を乞ひしハ
安き事なりとて来る日を定めしよその日遠く来るその
後駕籠就めて迎へ者日酒肴を供ておしり酒間
僅に画きて辞し去る又来るごとふ管待りとの如くかくて
ること凡五年ありて真の山水又画きて圖ハ春日山なり此
屏風今程其家ハ珍能いと云巢兆俳名高くして画を
好む者少し是俳諧ハ掩りあること京師の夜半翁
又ひと文化十三年に歿せり

筆匠篆癖の軼事

享和のよきめ筆匠善藏ハ江戸の人なり母事一孝あり
常ニ造筆百数枝ニ及バこれハ識る所の文人詞客の間
ニ賣り錢を得帰途ニあるに母嗜む所の食物を求め
詢りてこれをすむ嘗て篆書ハ能く李陽水三墳碑
を倣ひいそゆる瘦細圓勁の妙ありこれより六書の學ニ
涉り説文を研究し其始め解字標目を一タし其間記
一尋で全書を通説し疑ふところあれば説文繫傳同長
箋六書故同精記六書通考の諸書ニ折衷し又旁金石韻府
鐘鼎款識汗簡諸書ニ就て古文奇字をも正し此學六
進りしより貧乏して書あられが多方ニ書をかり或抄

はるりのあり或ハ全抄はるりのあり其苦學くのごとく
一日製筆以推の知己ニ至りてこれを賣る時ニ主人便面
をいづし杜詩秋興八首の篆書以て其時筆をとり忽ち
字の向中同字あるもの其體一字も雷同せるハなりし
となり惜哉三十餘年々狂疾を蓄りて歿す其比醫
隱老辻先生といふ人文以撰りて其墓ニ表一題し
篆癖先生之墓と云或人云此際六書を講ぎること久し
志する偶ハ異質の人ありて駭くこと此學ニ向ひまが
其成就せざるニ怨其壽を奪はる實ニ惜むべきことあり
かや

近世名家書畫談下卷 畢

近世名家書畫談跋

余賣典籍旁賣書畫夫舶來典籍所謂
 二酉五車照時定價故雖新種奇本而
 賜顧 尊容懷金問價聽其所買獨書
 與畫互有真假真假鑒別非吾輩管見
 所窺此固待博雅君子之印証雖然既
 賣書畫安可魚目混珠欺己欺人哉然
 則真假鑒別竊不得不任而後庶乎
 不悞賜顧 尊容於是雖殘絹片楮亦

名家書畫記 跋
復把玩猶心于識者或徵於紀載往々
如有所分所得也而苟關係于書畫有補於
賞鑒一言半語隨得隨抄遂得若干卷
固雖未免矮人觀場之譏敢不自計乃
於卷中採事近世編成二卷題曰近世
名家書畫談前卷錄書畫瑣言後卷錄
名流軼事併刻之于我玉巖堂以廣其
傳要皆淺近麤言非敢供于博雅君子
之巨覽姑示同臭且乞祭政嘗聞世之

輕薄子動評今之專門書畫目為隔年
桃符或為然耶余之於此舉亦不得自
不蹈鈴痴符之誚吁談何容易哉
天保紀元十二月穀旦

雲烟子 安西於菟識



霞亭長 渡部 璋書



名家書畫款

名家
真蹟

款字式

雲煙子摹集

名家書畫款

伊藤東厓先生

名海

物徂徠先生

物我

朱舜水先生

朱之瑜

貝原益軒先生

貝原

服南郭先生

服元

梁田蛭巖先生

蛭巖

祇南海先生

阮隆字平安滕直宿

淺井圖南先生

宮崎筠圃先生

成嶋道筑先生

宮崎 廿六世宮道筑

韓大年翁

韓天壽

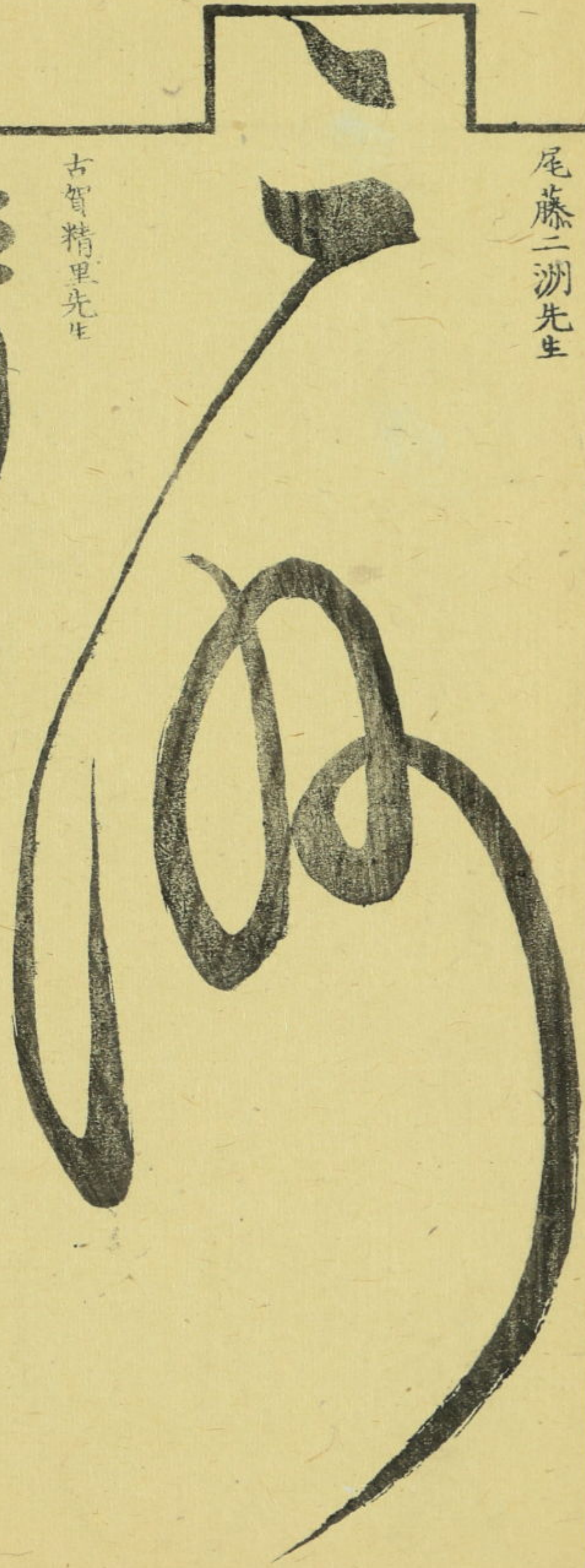
趙陶齋

陶齋

井金我先生

井金

尾藤二洲先生



古賀精里先生

精里

紫栗山先生

紫栗山

山

賴霞厓先生

賴堯

中井竹山先生

積善 眞

龜井道哉先生

賴杏坪先生

杏坪

菅茶山先生

菅茶山

皆川棋園先生

公川原

村瀨先生

村瀨

十時梅厓先生

梅厓

心越禪師

東華一以越如用寫

深草妙子

百拙元養和尚

多政海雲百拙山越

六如上人

六如持多

賣茶翁

釋無幻

大典禪師

無幻

大雅堂

大雅堂

謝長康

大雅堂

吳月溪

圓山主水

大雅之妻

木村兼葭堂

應舉

建業兆

長澤與

長澤與

高芙蓉

高孟彰

高孟彰

三熊花顛

釧雲泉

素山玉洲

三熊花顛

釧雲泉

素山玉洲

賀茂縣主

鈴屋本居

楯取與彦

高瀬

定長

伴高漢

僧澄月

僧大愚

魚光

小澤蓋菴

後

澄月

並延

甚尻

契仲上人

野口

契沖

蘭

北村

秀

西山宗因

宗周

甚真翁

榎谷

秘

其角

服部

凡

白井去來

立生

僧下那

入津乙州

乙州

小西来山

来山

秋原宗固

宗固

伊勢乙由

井上士朗

丁

之

雪中菴

雪

園女

智月庵

園

ち月

加賀素園

我

代

三國遊女長谷川

秋色

二代目芳野

川

色

芳野

沈南蘋

南蘋沈銓寫

伊字九

伊字九類

方西園

西園方濟

費漢源

吳興費漢源字

隨安

常用雪

鄭培筆

鄭培

胡兆新

胡兆新

右款字式ハ真跡

少ク摹シク僅ニ

名家數十人ニ

筆々余別ニ

近世名家落款

譜を志すは是也

まゝ開眼近き

あり於菟識

雲煙子編次

近世名家書畫談

二冊

出来

同

後編

二冊

嗣出

明清名家書畫談

二冊

嗣出

天保二辛卯年正月

江戸

横山町三町目

和泉屋金右衛門梓

